

山やま 嵐あらし

嘉納治五郎かのうじごろうの講道館柔道が有名になるにつれて、町の柔術家の中には、その評判ひょうばんをねたむ人が出てきました。講道館の門人が、町の柔術家たちにおそわれ、けがをさせられたりすることもありました。

「講道館の柔道なんて、お坊ちゃんのおけいごとさ。口先ばかりの理屈りくつで相手をたおせるものか。文句があるなら、おれたちと勝負しろ。」

と講道館にけんかを売ってくる人も出てきました。町の人々のなかにも、柔術と柔道のどちらが強いのか、という話がだんだん広がっていきました。

明治十九年（一八八六年）警視庁けいしちやうで武術大会が開かれることになりました。そして、その席上、柔術と柔道の決戦が行われることになり、それぞれから代